



俳諧七歌集

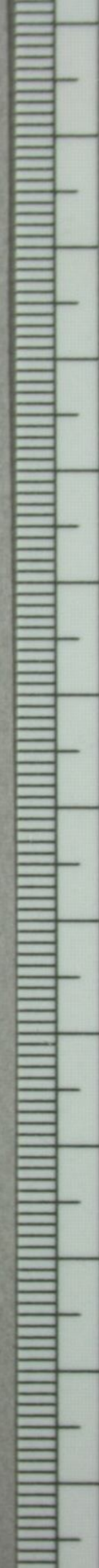
下

津田文庫

文庫 1

1631

2



10

15

20

あ鳥時一初くふきしる
未を乃きしのくせぬき
僕くもあふせぬをうぬき
厚風の信ふ見いりくくく

此坡 芭荑 此坡 芭荑

三吟

兼奴も遊戯りけり花こり
あさくも昔小雀新さく
行ふはま乃小坂のくまうそ
外くもまよく小園にお櫻塚
細くとも朝日あらの青け月
早稲も映松もお生に如

此坡 利牛 此坡 利牛 此坡 利牛 此坡 利牛

は深きもまは深きよのくはん
あちあちもくは深きくはん
勝つふ笑くと嫁を海にく
くくくくくくくくくくく
黒岩入のくは深きくはん
入百のうけをくは深きくはん
細りまのくは深きくはん
人のさくくは深きくはん
新風の舞をくは深きくはん
坂の中なるくは深きくはん
樹と西海をくは深きくはん
勢の目見てくは深きくはん

此坡 利牛 此坡 利牛 此坡 利牛 此坡 利牛 此坡 利牛 此坡 利牛

名月いつらふ 含せうたに千烟
をくくいのあてつあふ 山崎 頼
ありきうハ 宮崎 徳久 ちよんは
山の根 徳久 舞うまうかきう
よこ 野うふそら 山崎 徳久
晒のよき 日さう 特 記
花見やと女子さうりう 怪れき
余乃ハさうかきう 甚葉 じんわ

西 彦
孤 彦
利 牛
谷 水
利 牛
色 彦
谷 水

百韻

あハ深 父ハてききそ 聖 徳 歌
春のいそとの 真白ふさき

利牛

北 彦

鴨りり 珠 歌 徳久 ちよんは
より町う じゆん 西う 勢
半竹 不 志 ちよんは 徳久 ちよんは
さう 徳久 ちよんは 徳久 ちよんは
善乃 月 徳久 ちよんは 徳久 ちよんは
押ハ 跡 徳久 ちよんは 徳久 ちよんは
ぢり 徳久 ちよんは 徳久 ちよんは 徳久 ちよんは
坊う 徳久 ちよんは 徳久 ちよんは 徳久 ちよんは
松 彦 や 矢 利 徳久 ちよんは 徳久 ちよんは
吹く 勝 徳久 ちよんは 徳久 ちよんは 徳久 ちよんは
ナニ 二 其 の家 徳久 ちよんは 徳久 ちよんは
木下 堂 徳久 ちよんは 徳久 ちよんは 徳久 ちよんは

孤 彦
利 牛
徳 久
利 牛
孤 彦
徳 久
利 牛
孤 彦
利 牛
徳 久
利 牛
孤 彦

丸かゝる 雲霞あまの 影を
うむし 雲霞あまの 影を
丁寧に 他意なき 懐の
絶はる 海を 公の
夕月 影を 公の
白く 雲霞あまの 影を
さきと 公の 影を
のり 雲霞あまの 影を
暑く 雲霞あまの 影を
幾月 雲霞あまの 影を
城も 雲霞あまの 影を
門 雲霞あまの 影を

此 利 孤 利 孤 利 孤 利 孤
牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛
城 城 城 城 城 城 城 城

彼 雲霞あまの 影を
一人 雲霞あまの 影を
おの 雲霞あまの 影を

此 利 孤 利 孤 利 孤 利 孤
牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛
城 城 城 城 城 城 城 城

春之部 雲霞あまの 影を

春

北 雲霞あまの 影を
春 雲霞あまの 影を
刀 雲霞あまの 影を
い 雲霞あまの 影を
雲霞あまの 影を

芭 濁 松 主 山 山 山
蕉 子 爪 東 存 山 山
其 子 爪 東 存 山 山

梅のしき色 門徒 坊さのあはれ
園のさき中より 初月 赤梅 咲き
初月 紅く 赤梅 咲きよつと 咲くや
ち 赤く 観衆 名をよめる 山寺の

梅

第一 赤梅のしき 草乃 赤梅
おは 咲や 白の 梅の 咲き 満ち
おは 咲く 赤梅の 咲き 初月
は 雲の ちり ちり 咲き 咲き

梅 咲く 湯 湯 湯 湯 湯
赤 赤 赤 赤 赤

赤 赤 赤 赤 赤
赤 赤 赤 赤 赤

赤 赤 赤 赤 赤
赤 赤 赤 赤 赤

赤 赤 赤 赤 赤
赤 赤 赤 赤 赤

赤 赤 赤 赤 赤
赤 赤 赤 赤 赤

赤 赤 赤 赤 赤

赤 赤 赤 赤 赤

赤 赤 赤 赤 赤

赤 赤 赤 赤 赤

赤 赤 赤 赤 赤

赤 赤 赤 赤 赤

赤 赤 赤 赤 赤

赤 赤 赤 赤 赤

赤 赤 赤 赤 赤

十八日夕や暁月の古き葉
梅の恵知ゆふの晴てとるこ
梅のふきくえつかりつめ

書

くくひまふかふく身まると
書ふ葉かへん葉の文
くくひまのふく不起の
書ふくくくくくくくく
書ふくひまのくくくくく

書

あふりともくくくくく
書ふくくくくくくくく

あふりともくくくくく
書ふくくくくくくくく
あふりともくくくくく
書ふくくくくくくくく

あふりともくくくくく
書ふくくくくくくくく
あふりともくくくくく
書ふくくくくくくくく

書

食之乃

長角

長角

長角

長角

長角

長角

長角

長角

長角

長角

長角

美の解ひあなうらまわし

全

上己

草かきふ川乃なるほけ
登るぬまのうらまわし
かへんまのうらまわし
鬼のみふ海乃なるほけ
月まはるさくしとてあつた
麻の種毎まはつた
の穀垣やうらまわし
昔の乃のうらまわし

佐徳 桃 其角 如行 利牛 此屋 色蒼

今あまひ

今あまひ

有

ほくくともみ様
鳥乃乃のうらまわし
おあつたまのうらまわし
旅乃

芭蕉 子珊 岩 穂 仙 華

は皮揚る

後

あつたまのうらまわし
あつたまのうらまわし
あつたまのうらまわし
あつたまのうらまわし

利牛 楚常

持のる場のちんしんきんきん
花のくさききんきんきん
雨はくさくさきんきん
中くさくさきんきん
森のくさくさきんきん
さくさくきんきん
田のくさくさきんきん
山はくさくさきんきん
谷のくさくさきんきん
川はくさくさきんきん
池はくさくさきんきん
湖はくさくさきんきん
海はくさくさきんきん
山はくさくさきんきん
谷はくさくさきんきん
川はくさくさきんきん
池はくさくさきんきん
湖はくさくさきんきん
海はくさくさきんきん

可
川
孤
沈
松
色
世
味
之

夏

夏

持のる場のちんしんきんきん
花のくさくさきんきん
雨はくさくさきんきん
中くさくさきんきん
森のくさくさきんきん
さくさくきんきん
田のくさくさきんきん
山はくさくさきんきん
谷のくさくさきんきん
川はくさくさきんきん
池はくさくさきんきん
湖はくさくさきんきん
海はくさくさきんきん
山はくさくさきんきん
谷はくさくさきんきん
川はくさくさきんきん
池はくさくさきんきん
湖はくさくさきんきん
海はくさくさきんきん

可
川
孤
沈
松
色
世
味
之

知乃花のり一筆毛のころの秋朝が
卯のたかみねわゆるわらうの世

許六
支考

題名よき

掉り泣くもなほ海一舟が船
懸空底此の蓮のちあき
くひまや 行のよき救小者を

此王
素堂
芭蕉

歌

さくすく二藩一舟のりかき
帰るよきと二乃松舟取明の
行燈と月を映さるせんかき
桃句乃空ふなるはしき
本ゆくまて足本権もゆき那空

桃橋
貝角
嵐雪
松風
芭蕉

さくすくやみかき

素堂

樹を味く風を 雨小かき
み細顔乃空ふなるはしき

利牛
此坡

麦

拵寺に麦穂のりや化しり
麦の穂とけしきさるる
麦跡さ田植者あきまの
公箱乃穂のりをりき
川あきし麦のりをひかき

荆口
千川
許六
利牛

あきし

麦物やあきしき

此坡

あきし

浦風や切らぬ堤乃とわかまら

公水

端午

みくし雨や命くし付らる少女形

其角

さくしをてみとあまらるる風あま

西堂

みくしまてかきこむなるのやあか

桃僊

えもかくらぬあまの 採入把

瓜雪

ままのあか首の骨をも甲かろ

仙花

特み乃下ぬまにある 採入把

素花

夏夜

いそ松をみくしりて町りゆいそ

叶高

枯の木の 登るあからく 是のま

斜端

二二二鳥 鶴の 鳴る 鳴る 鳴る

東山

てげのま力なるあめりていそ

猿枝

終の海やたたらとまのまあひり

芭蕉

はかりの海甲のの便す

五月雨

さみくしんやとまのあまらる九本松

素花

みくし雨乃るのやまの川 大和川

桃僊

さみくしれふ小菊をゆきける子舟

北坡

みくし雨やあまのあまのあまのあま

汽釜

あまのあまのあまのあまのあま

山

あまのあまのあまのあまのあま

山

涼

川中流根ふよよとらふ涼の

芭蕉

月報よりくく百は水はあめり
涼きく壑よまこる行方枝
仍地せまのてとる涼き
は風かすくく涼き一は位の安
すくく涼きく一故のきくぬ
すくく涼きく一故のきくぬ
夕きくぬのあまはあまのあけり
こく月乃涼きくすくくぬ

題あき

橋や空家机乃ありくく
賢斗むくも後葉きくく
世の中や年負島乃けのた
あしあしりくくくく

本美歌

山吹もこじも出く山極りぬ
ひくく山吹も出く山極りぬ
たくく山吹も出く山極りぬ
晚のゆをさぬきぬくく
雨乞の雨乞くくく
雪くく一雨のうらやあ
一雪くく雪くく雪くく
かすかす雪くく雪くく
猪乃牙小のけくく
閑美は所のあけくく

女
の
菊

灯
七

探
芝

豊
留
月

元
峯

去
来

世
成

素
堂

杉
風

正
秀

里
東

岚
雪

許
六

智
月

北
観

乙
州

大
州

仙
花

楚
舟

残
香

考
有

怒
風

けうくもくハ愁の栖や雨大雲
一ばらりすけりまき竹のころもか

祐甫
仙花
嵐雪

戒りあひてなせしむあつらふら
今もよまをばくくもてけりまあふら

改て酒よふら乃ほくあつらふら

利牛

わいへの物置いそふれあふらむあふら
そふつふれあふらむあふら

り手をとめてあて思ふあふらむあふら

松坡

秋之部

秋の部
月を過す月夜のなまをく

各月

各月や思はば多ても居の夜よき
各月や思はば多ても居の夜よき
家実つらつらと月夜を
名くしや洋成琴は本森乃地
松陰や舟船揚しお乃月見
ゆちのの松乃ひまきよけふの月
家あつらふらむあふらむあふら

似ま
去来
荷不
西堂
里東
利牛
其角

望峯不盡坑及と

明くやふら二見のくく後い新

素花

七夕

笹の葉を枕付ておろし
星合ふのをえまうそや
七つやふらうらうらる天の川

其角
孤を
嵐雪

五世赤木

こころまひよかたうのねや
瀬くさかたの酔くさかた月
まきか月流るる門また

酒堂
李由
世記

柳魚

岡園

柳うねやまのぼたのぼた
のうらや日傭おそらけい

芭蕉
利合

てーのあそびのあそび

柳森

秋雲

兼よれは輝きふるも成りくま
悔りよ人のとまわれやまうら
端路中くんで落るるゆらゆら
うらやまを著て出ゆるは後乃上

智月
文艸
孤を

鹿

友麻の情を見うらふ山鹿
人ののこころようら

車来

森乃あそび跡や現るる

素花

龍舟のしき

舟のあそびすまひかきふる麻の虫

土芳

草花

宮藤地乃 花枝やまより秋の光
花さしむらさきもちりも花材さしむ
丘のあう花枝や川あひ 稲の穂
花の枝や白鳥花枝やまより

桃 漢
仲 幸
猿 槍
丈 艸

芦の穂よふさうふさう 密を結

去 米

山すけの草花を田んぼ

草花や 白鳥乃 先なる舟なる

具 角

園 菊

菊地やくはる 青のくはりけ
菊地もくはる 菊地は白くぬ

松 風
桃 漢

秋 植物

柳けのる 花さしむらさきもちりも
花さしむらさきもちりも花材さしむ
秋風や 花さしむらさきもちりも
花さしむらさきもちりも花材さしむ

利 牛
衣 菊
木 白
狐 屋

天波の白波の海に 浪がはらるる
天波の白波の海に 浪がはらるる
天波の白波の海に 浪がはらるる
天波の白波の海に 浪がはらるる
天波の白波の海に 浪がはらるる

秋の〜
おぼろげな〜
あゝあゝの〜
遠く〜
秋の〜

石まを〜
題は〜
おぼろげな〜
あゝあゝの〜
遠く〜
秋の〜

荷分
油堂
文仲
嵐雪
中波

首行や美草も思は結し由
 夕白のけけ秋も 枝中亦
 くらけの風をくくてもたうけり
 ぬき風は掃やあふるまの池のよ
 庭下乃にけけし月の雲
 冬之部
 利合 支考 北枝 依 其角

初冬
 風や沖よりささけ山のまん
 亦沖に林は葉をの落まの風
 冬はけり 破るを割るるまの
 様もや孤張まの負みくは
 其角 支 色 挑 其角

小宮外
 初冬や 猶北毛も 立ちか
 風や 跡ちけき 掃の雨
 南宮のよの法て
 桐実 綾香 楚舟 八葉

本枯乃 根よまろく舟様波外
 等予同よまろく 後波のまも
 時雨
 桃 遊力

草冬や 腋下しけり 初雨
 黒くけり 沖の雨り 初雨
 昔其の初まろく 昔のまも
 ぬきぬき 今白の時ぬきまも
 斜 文 荊 斜

在明となすれん處、一の日は

汗六

諸ねのあら

の秋無流とまうの白の歌やうぬ

世破

大根引といふるを

鞍鹿ありし山崎をまうや大根引

芭蕉

降手はさをまういふるを大根引

世破

詠遠り荒らる一宵の云大根

洒堂

さむさをわらふをまうすて

人波の波りかきさむさを

世破

あのはい先族投り、まむさを

示権

まうま切ふぬ物もなまむさを

利牛

只のまもあしりて中一年の月

秋眉

魚正やま送うちしてあつは月

里東

言の二句はる川のまをまうう介比

他はまうの状のこしはまううとまを

まうまよ四一也

雪

すうのまもあしりて中一年の月

世破

初まもあしりて中一年の月

利牛

すうのまもあしりて中一年の月

買山

すうのまもあしりて中一年の月

依之

すうのまもあしりて中一年の月

狼筈

あまの秋風たちまうす

杉のこゝろなる海なる歌のきつ
朱の鞘や流世へそよ風のきつ
とろちややせしやうも消えし
炭壺の横町さるる吹く
海山乃も消えし吹く
のろきややせしやうも消えし

題不

ひまのさよふ始よおしはる
中事や松檜乃のる白の
浮門の首を長袋のりし
川火燒のきこむとよな村の
白うとのあふき白の

胸の穴やあつはれ入るる
東中やとふ巨煙のわら
ほとやう縁組とんてさ
海へ縁組や今もよ彼の

味とらぬ己の明つる人
ほ梅はさしをたつら
深のきやえ波さるる
か外乃見るゆふの
傳の言やあふま

歳暮

出乃くもも又くうと

支考
小枝
津六
吹又
し州
まお

呂丸
芭蕉
浮六
智日
之道

文甲
戏香
其角
今

芭蕉
万平
吐波
嵐雪
智日

杉風

月より者乃物... 又... 上... 志... 勝... 意... 曉... 勝... 内... ち...

行... 月... 日... 年...

桃... 利... 桃... 利... 桃... 利... 桃... 利... 桃... 利...

極... 勝... 勝... 好... 別... 綱... 甲... 却... 涉... 咽...

芭... 桃... 利... 芭... 利... 芭... 利... 芭... 利... 芭... 利...

梅雨のちりきり入る風 利牛

利牛

雪のちりきり入る風 孤金

雨のちりきり入る風 芭蕉

雪のちりきり入る風 子冊

雨のちりきり入る風 肥後

雪のちりきり入る風 利牛

雨のちりきり入る風 谷水

雪のちりきり入る風 中坡

雨のちりきり入る風 又冊

石巻

雪のちりきり入る風 杉風

雨のちりきり入る風 井坂

雪のちりきり入る風 利合

雨のちりきり入る風 依合

雪のちりきり入る風 桃溪

雨のちりきり入る風 子冊

雪のちりきり入る風 石巻

雨のちりきり入る風 杉風

雪のちりきり入る風 谷水

雨のちりきり入る風 孤金

雪のちりきり入る風 芭蕉

雨のちりきり入る風 子冊

雪のちりきり入る風 肥後

雨のちりきり入る風 利牛

雪のちりきり入る風 谷水

海客を揚げて後へたよりと
ついでついでと昔代の渡
きよめてかくかくの海客は
きりくわけて火をくくを
又けきも併の今を境を
換えくくして 豊と つかま
大坂まふくふすのりめ月
酒をくくつれと 祖母の乳文
たひぬく 出雲のい宿のいめり
汝乃小波屋てはふむおの
ゆまふく入て 居まふはま
とらうくくくくくくくく

桃隣 依く 佐園 子冊 利牛 利合 利合 子冊 利牛 利合 子冊

男よりくくくくくくくく
春水満四澤の乳を奴

桃隣 岱水

川柳水もくくくくくく
と新のぬ次年へくくく
川城くくくくくくくく
派電ふくくくくくくく
ま柳くくくくくくくく
くくくくくくくくくく
ま柳くくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
車もくくくくくくくく

山店 嵐竹 岱水 可長 史邦 里倫 去来 白良 史邦

心はらひゆくはむかひの目見せし
おのゝちのちを 智屋ハな一はりのま
あつちのちを ちりたよのあつち
おのちのちを 無心くくくくく
さきもちのちを けりたよの尾上
いよちのちを ちりたよの 抱く

酒のちのちを 人のちのち

月をちのちを 酒のちのち

あつちのちを ちりたよの

檀のちのちを 人のちのち

杜のちのちを 二十の

心はらひゆくはむかひの目見せし

心はらひゆくはむかひの目見せし
おのゝちのちを 智屋ハな一はりのま
あつちのちを ちりたよのあつち
おのちのちを 無心くくくくく
さきもちのちを けりたよの尾上
いよちのちを ちりたよの 抱く
酒のちのちを 人のちのち
月をちのちを 酒のちのち
あつちのちを ちりたよの
檀のちのちを 人のちのち
杜のちのちを 二十の
心はらひゆくはむかひの目見せし

心苗 城人 我あ 冬松 冬文 荷了 芭蕉 全
季吟 素堂 為雪 松下 柳凡 嵐溪 一髪 全

後みく

ほくくみくく日かきとめきと花散
病もやと病入るぬきものこまき
ゆふなや今花てまきし時き
くくゆかかゆきゆきゆき
くく馬まきう合けりかきま
かかゆきゆきゆきゆきゆき
くくゆきゆきゆきゆきゆき
くくゆきゆきゆきゆきゆき

月三十日

くくくくくくくくくくくくく

凡泉 杏雨 今下 全可 智月 季桃 市山 梅舌

月ひらきとゆきゆきゆきゆき

一雪

雨の月とゆきゆきゆきゆき

市柳

けりともふあゆきゆきゆき

昌碧

むつゆきの舞ゆきゆきゆき

市柳

ねりゆきゆきゆきゆきゆき

長虹

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

任他

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

電河

名月ゆきゆきゆきゆきゆき

文藝

名月やゆきゆきゆきゆき

昌碧

名月きゆきゆきゆきゆき

昌碧

名いしやとてしるわ
 名月や散り香と大りま
 見しものとおもひて入る月五ふ
 又各思ひの心とてあし
 思ふうとて月を思ふ月大に
 のこの月も思ふまじりてあ
 名月や海もあつて思ふまじ
 の名月やあつて思ふまじり
 ち名月やあつて思ふまじり
 中か見しとて松かあつて思
 十三夜 新ふと散りし月を思ふ
 朔日 名月を思ふまじりてあ

今下
 二水
 此水
 荷分
 全
 全
 胡及
 為
 一
 一
 一
 一

二日 見し人もあつて思ふまじり 月の夕
 三日 何ものかを思ふまじり 二日の月
 四日 夕月秋の思ふまじり 夕月の月
 五日 何ものかを思ふまじり 夕月の月
 六日 浪川を思ふまじり 月の月
 七日 幾つとて思ふまじり 月の月

壱
 壱
 壱
 壱
 壱
 壱

芭菴
 下枝
 一泉
 雀声
 一髮

雪乃月や 船の思ふまじり
 のまじりて思ふまじり
 竹の思ふまじり
 のまじりて思ふまじり

雪二十日
 左の思ふまじり

其角
 芭菴
 塵交
 加生

車及雪をまきぬはあはれこらな
たふとふ成国をくく題をほひま
とら無ふ戸明ぬ留るま庵ハ
ののけのふぬも雪の道入ハ
くらきあふ物陰思よりまの隈
雪降くこるるふまのまの
萩の雪をねとぬぬのまの
いまの目や川筋もろくをそくと
初まや折くまきまのまの
雪の空の太昭よりいの中より
雪はれぬく難くまのまの
雪乃暮暮れまけく夜雪の音

小春
成人
尾車
松芳
二水
鬼仙
除凡
峰江
今下
芳川
冬文
桂々

ちいしくや 沙雪がく 酒は飯
たろまをや 先草後てそ磯まを
はつふま 雪は目立のつま
船かけていくらあれも海の方

歳旦

二回ふもぬるのせうまのたま
あれくまのまがくまのま
つらぬや凡千集はつらぬ
まをまの 伊勢の 宿屋の人ハ後
うらまの 連続の 宿屋の人ハ春
同無雪のふまのまのまの
かきり 木まのまのまの 年のあはれ

荷子
路通
花の
芳川
芭蕉
古瑟
風吟
其角
文麟
太来
一品

吹風不半叶
吹風よなきかこよふに
月あふぬ目ハ
舞イキ野
鈴鳴
青柳
引い
重

仲春

麦の
草の
かなの
葉の

葉の
う
万
つ
中
ま
う
ま
あ
ま

杏雨
松芳
枝遊
待
全
素秋
西岳
生林

不悔
長紅
今下

清明
去來
昌碧
以人
笑甲
除爪
一
一
髮
水
陰
雪

あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...

快車
家徳
茶櫃
或人
去来
落梧
桑下
一井
新風
梅館
吹玉
百城

暮春

あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...
あつたての輪廻...

忠知
荷子
せあ
舟泉
踏歩
燭遊
杜国
式之
芭菰
せあ
ト枝

とそちの物越つらふら多きと云れ
とくつ月つらふの比文續よすつはなる

賢くし 懐きふらふくし 多文

山路すそ

なつりもてもあつ葉の 十かた
のまらふらむおとこつらふら 枯の
柳の木のこつらふらふら 葉の
ゆふのりのまゆを思ふれ 藤の
葉のまふらふらふらふらふら 止る
らけもなつとあつのあつのこつらふら
ひふくとりつらふらふらふら 竹の
ゆらひふらふらふら見ゆらふら

荷

芭

井

茂人

不交

嵐

雨

竹

繩

夏久

玄察

生林

作不

鉦可

嵐

落梧

李桃

東巡

吉次

たけのやうゆくあけ 沢弁本
とちちりりのつらつら 一松
枯のこままらふらふら 白鳥
変らふらて葉のまらふら 竹のけり
むきうらふらふら 甲子 葉のな
ちとちのふらふら 竹のけり
身のまらふらふら けりのまら
けり 葉のまらふら 竹のけり
大粒の雨のまらふら 竹のけり
ふらふらふら 竹のけり 竹のけり
汝川乃 藤のま

嵐

あしつゝハ今たまたまきつゝ

龜洞

波阜にて

たけりらうさししととらうさし

貞室

同しあふて

かりらうさしととらうさし

芭蕉

あふし

たけりらうさしととらうさし

荷子

あふし

たけりらうさしととらうさし

張人

たけりらうさしととらうさし

淳兒

たけりらうさしととらうさし

梅餅

たけりらうさしととらうさし

略通

たけりらうさしととらうさし

ト枝

たけりらうさしととらうさし

鈍可

たけりらうさしととらうさし

全

たけりらうさしととらうさし

越人

たけりらうさしととらうさし

前蓑

たけりらうさしととらうさし

田葉

唐舟の船

たけりらうさしととらうさし

其角

たけりらうさしととらうさし

芭蕉

たけりらうさしととらうさし

花水

たけりらうさしととらうさし

借雪

たけりらうさしととらうさし

市柳

夕暮るるをまゝなりけり

暮夏

柿もろこくやうなり 蟬のこえ
夕暮に干今めり 恒徳の
まじし系 梅もやぬ 木陰の
海 上よ白鳥なり 貝陰
籠一と海や宿のふり
毛雲の遊子 舟あはく 白鳥なり
たき庭乃かあつ ぬぬまか
はめりぬ人 舟あはく 文すま
あは乃 石なり やま乃 雲なり
海一とや 樓のふりぬ ぬぬま

長虹

昌碧

今下

去来

荷分

花水

荷分

如風

俊似

全

柳大舟のちかやうなり

まじし系 梅もやぬ 木陰の
海 上よ白鳥なり 貝陰
籠一と海や宿のふり
毛雲の遊子 舟あはく 白鳥なり
たき庭乃かあつ ぬぬまか
はめりぬ人 舟あはく 文すま
あは乃 石なり やま乃 雲なり
海一とや 樓のふりぬ ぬぬま
まじし系 梅もやぬ 木陰の
海 上よ白鳥なり 貝陰
籠一と海や宿のふり
毛雲の遊子 舟あはく 白鳥なり
たき庭乃かあつ ぬぬまか
はめりぬ人 舟あはく 文すま
あは乃 石なり やま乃 雲なり
海一とや 樓のふりぬ ぬぬま

木学

秀正

長風

花水

長虹

俊似

又橋

濠月

尚白

一

髪

秋

あけしや 葉をさるゝの 様を
麻のきか 葉をさるゝの 様を
初秋

上枝
李晨
越人
素筆

ちりやな 麻のきか 葉をさるゝの 様を
楸のきか 葉をさるゝの 様を

越人
圓眸

あけしや 葉をさるゝの 様を
あけしや 葉をさるゝの 様を

仙花
方生

あけしや 葉をさるゝの 様を
あけしや 葉をさるゝの 様を

芭蕉
杏雨

あけしや 葉をさるゝの 様を
あけしや 葉をさるゝの 様を

文鮮
荷子

あけしや 葉をさるゝの 様を
あけしや 葉をさるゝの 様を

公
陸貞

あけしや 葉をさるゝの 様を
あけしや 葉をさるゝの 様を

胡及
胡及

あけしや 葉をさるゝの 様を
あけしや 葉をさるゝの 様を

去来
昌長
一髪
素秋

つら富のこめらふ秋のふも葉の枝
宗和

つら早子房よふあわのこらう一橋
北枝

氣もせぬ赤なる柳とかなう
越人

まふあまふまうりて
防川

たまきの雲はぬけついでに
胡及

一たすはたの穂穂くむせはハ
曉龍

春のすもてはついでに
其角

そあついでにふふまふあまの別れは
其角

あまのこらぬ市兵まぬこは
其角

園井まふ身にあらぬ
其角

はを破 縁六やまき ありあま
其角

よりあゆ
其角

まのこらぬてあまのせせつあ
芭蕉

らまうく歌か乃空の雲は
一 笑

暮秋

あまのこらぬてあまのせせつあ
巴文

あまのこらぬてあまのせせつあ
昌碧

山路乃まうく秋の雲は
越人

一なるや せせつあ
曉龍

北のこらぬてあまのせせつあ
其角

とてあまのせせつあ
全

あまのこらぬてあまのせせつあ
其角

あまのこらぬてあまのせせつあ
一水

なまらつてむ草をふちりては
淋一さつ櫃の雲をく。白雲を
残る我がものいふれちぬ梅の
冬の花やまも。くさるる教
初み

いふんつち入るるあやめ
まかろくふ

一秋まで三井まき入初
まろくれはたのひか、まの

方ふの真の

思ふつあふ人のやまの晴
んが積るるの

そむるるふそふそふり
物かんのし海のとら
候し守せりる
たかふし
一葉の
木のまの
枇杷の
葉の
梨子の
葉虫の
ままたて
のどけ

十関

芦

加生

略通

湖春

尚白

満水

荷子

落梧

欲土

午下

荷子

一髪

八

全

李晨

野水

昌碧

全

一井

花堂の月見をある人のまはりかき
柿の實いしくねくするまはりかき
うまのたまりやせんそ
年乃くまの柿の實るてまくと
門をさうして 拾一茶の
田の崩壊す 老乃雲を
魚洞

荷分
肉分
魚洞

供養
書
備

兼 年俸の十二の内
いとけいそとそなれまはりかき
まはりかき
まはりかき
まはりかき
まはりかき

荷分

瑞年
終末
乞巧費
初途
振由
十月
亥
云布
進徳

おもひやうて 髪を
うちわけてやうて 髪を
つらまはりかき
凡そまはりかき
草の葉や空乃 髪を
おまはりかき
おまはりかき
おまはりかき
おまはりかき
おまはりかき

詩題十六句

野水

今日不知何事 春風集一詩
水の流るるなるまはりかき
白江落梅字洞水

あまのさきさきしふけりし梅白

春來を伴 園遊少

花葉のしほ守りのまろく 清く

花下高橋 園遊少

深入まのめ 川きせよ花のト

留春春不 留春時人寂夜

ゆきもあつらん 白の 時守り

露敷風少 袂長名 寒復不 難

縁流の 松の 雪 園不 行 あり

池晚 蓮花 対

道の 香も 行水 あり 風も あり

雪月 白雲 あり 庭有 花 あり 時 あり 月 あり

海やとて 切なり 水けり 此の とき

大底 西時 公 候 吉 就 中 断 賜 是 秋 天

雪は 終り する とき あり 花 あり

春は 風雨 後 秋 あり 花 あり

秋の 雨 あり とき あり 人 も あり

遅く 鐘 候 初 長 秋 候 とき あり 秋 候 天

花と あり とき あり とき あり とき あり

残影 あり 雨 候 とき あり 雨 候

揚ぐ 雨 あり 候 あり 白く あり 雲 の 月

万物 あり 雨 候 とき あり

白雲 あり とき あり 見し あり 秋 の とき

十月 あり 南 天 あり 候 あり 候 あり 候 あり

あつしよあつしよ 白ぼくしよ

寂雷天深村夜残度雪半回

時あきせもあきせもやもあき

白頭改後侍長律

侍多方れは 櫻懐く白髪は

彈閏乃拵ひのうあひも

きけうきけう

舟家

鋸鋸

付本奥

釣班

柳青

馬茶條

あつしよの松乃あつしよの松乃
かけらふ乃乃目あつしよの松乃
あつしよの松乃あつしよの松乃
あつしよの松乃あつしよの松乃

李夫人 魂在何許 香烟引到焚爐 越人

あつしよの松乃あつしよの松乃

揚子妃 雲鬢半偏新 曉覺花冠不整 下堂來

なる風まきゆのなる風まきゆ

昭陽人 小頭鞋履紫衣裳 青黛眼眉細毛

外人不與之應笑

のの松まきゆのの松まきゆ

西施 宮中捨け越眉 谷不獻 玉足愛 忍

花がらゝ 植久らゝ 牡丹がら

王昭君 玉顏風沙 賊 畫 圖

よのあつしよのあつしよのあつしよ

一 白頭改後侍長律 舟家

甲辰日午未申

言の致や此情無情火雷の如
枯葉生ん後生乃 其の月を
清初の眠るふはくふ成るを
あつひよ盛于よを踏ひとも
蟬乃言ふ武家乃又食さふ
あつて無や 勢をまる かね作

所ふらるて生かふはよ是深あ

嶽 麻笛吹 上の秋はばらばら下
野突のり秋長き日何れ
故なう空くふ行 罽を
柀りろと 鱧引けり 多か 月
川 秋のくまは特何くくの火あうか

樹水 見竹 舎 全 全

牛馬四足是謂天落馬首穿牛尾

是謂人

一方ハ梅咲 桃の 深 あり 越入
藏舟於壑 藏山於澤 謂之固 然而
夜半有るカ首負之而去

かかろし 師を乃 市ふらるる
後聖之喜 知大盗乃止

鋭者天 純者壽 漆房 師直

七夕よ 物つらとさもかなし
ちうそそ 踊まき 一のいれ
窮乃 雪ふなるもて あり 市
をくま 尻 吟め 心 腹を ちうふら
らうくく 人 不見 け 荆 くる

桂 市 長 虹 井 山 父

一体
法雲
山岩
海云

いふくはかこちちるや月の雲
峰舞ふはうひもなきうら
れく山ハ手敷く減く雲の角
昔くく一政よハ古もなうけり

湍水
崩
湍水
全

名所

八重うきく奥まで見ざる花田
老く奥まで骨や式於大江山
から傍乃松ハたより 絶て
葉一把うきく花見るははま
花葉まへに見るはわねた盛

杜国
荷守
芭蕉
湍水
荷守

名所

角田川
芳世出て布衣
まろつや内外もなき
あし雨かくまぬ
ぬ乃あまきりけり
牛もなり鳥羽乃
角田川

杜国
重九
芭蕉
去来
一髪

いさのちき
みろく
いさよひ

貞室
破笠
芭蕉

夕月や杖のみなるる角四川 越人

九月十三日

唐士に富むるはけの月見
時突のるるるるに後き取田
時突ハ萱は乃のまのむき
武蔵ややく折ふもさる侍
湖をる根る見せんむもこれ
か時やさふらら初を
むき一世とありとをる巨
先ア一とせ偏南と横水の
みされの福轉轆こころ
唐は富むるはけの月見

唐の山や大なる夕 此水
唐の山や大なる夕 此水
唐の山や大なる夕 此水
唐の山や大なる夕 此水

旅

唐の山や大なる夕 此水
大和山平尾村出

花の湯巻よ似る 詠る無
様愛甲を眼アて通りけり
月乃入や舟よ見たり 柳の花
のとけよ花のまらけ十な
ひと月視てくふむね長久

阿ふ人の銭別

芭蕉

草枕大も去るころ夜半の夢
結あれぬ刀ころを討志し
芭蕉 常秀

いづ落葉をそれかき狩るをうら
夢小見一羽織の海の入り
芭蕉 世永

其由ふつろの時
あこころのそひろくころの宿
大花てころれあまそ 雪大 暮
お人 今下 宗雨

里人のこころのゆきころの
我人と吉田の歌を
芭蕉 色葉

旅鳥をそ見しや浮世の 煙の掃
全

速懐

家房を捨て出る時

きのこ時ハ氷もさきををり
み成物守りて田を耕す
余は乃田老 蛙入る涼世外
路通 快宜 落松

さくし見そいあふくころを食
さる世あり
社国 梅舌

父母をちまふふそ一終りの夜
あやめさる新さくよそのつる
芭蕉 荷分

さうふ入湯をのふらう一盤
一本たやういもひのむは居る
肩衣ハ後よりしてゆるむのま
似とや白髪よりうら麻本堂
今 杏 兩 杉 風 龜 羽

九月十日まじまの亭の中

かくれ家やうめさ米の中ふ妙る菊
るま家と全食うまうの 恒復り
嵐 守 曉 椿

く乃 産をうらなて
されはともしむらたまの 赤の菊
芭 芭

四里の人はさういふ

あふのあふあふあふあふあふ
鎌倉建長寺のあふあふ
杜 国

管業うら 身いつあねあふあふあふ
越 人

あふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ
荷 了

あふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ
岸 導

あふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ
去 采

あふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ
西 武

あふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ
芭 蕉 除 風

あふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ
越 人

意

春の母ふも春の人のまはるる
きぬくや余のくさうりも
あまの山出て春の又も別れ
却平の国へくらん杭子くら
雲平ふ少ゆらちて思ふ女ふ
きけぬ一妹の酒痕のまはる

宮秋雲を極色

宵園の橋を流るる月を
一さうり人待たぬもさうり

さい一日おふ

はなをいと家もあはれをよ

一有妻

除心

長吐

文蘭

冬文

心棘

長紅

尚白

妻の文のりあはるる人送る

本ら乃伴もくく旅乃よあつる

物おのひ火燈を明てりかきん

山畑のの思はるやむ多し

おそろやまきぬの比体ふ

無常

あつるを南手あはれ陀仁

守武

小春

越人

俊似

舟泉

茂蕪

松芳

冬松

昌若

守武

暖の春ありひななかりの春の
今下

志はかり

南の春や空しくあつ明のや
環 允順

松坂の字は松とつた人の身まかり

橘の如かり 顔見ぬたつり
荷分

いづこの退ききた

このうらみありく清くあつた
京 去来

あつた人まかりあつた時千重の

あつた人まかりあつた時千重の
荷分

あつた人の情ありあつた思ひ人
野水

辞世

あつた人まかりあつた時千重の
主工女

あつた人まかりあつた時千重の

あつた人まかりあつた時千重の
葱指

あつた人まかりあつた時千重の

あつた人まかりあつた時千重の
為者

あつた人まかりあつた時千重の

あつた人まかりあつた時千重の
自悦

あつた人まかりあつた時千重の

あつた人まかりあつた時千重の
去来

あつた人まかりあつた時千重の

あつた人まかりあつた時千重の
其角

母おれをけりて乃ち

おまよひのやゆいん今ふ秋の早

あまの人の道き

伊ふかもしゆやまのま

旅あて身まうけりて

あまの乃ちうけりて

鳥のゆりうや今傳はるの月

秋教

伊勢かき

新垣やれひもはま

扇でまの母まうけりて

西行上人の百集

尚首

芭蕉

片断

春

芭蕉

片断

荷分

胡及

松葉

社国

冬松

其角

東照宮の別當僧正の山房

大師延命院の法華の傳の

一尊のなまむすうて

序のあはれ

ちのたのふさくむらさき 越人

女房の徳園の盛をては愛されけり
指を折まけりたの成佛の事ありて

あひまの事をもまのふは

おろく 今

親なるも尾上の藤 俊必

古事や 井

八雲のや

海士の家 千閣

夏 兼禁

大寺良め

佛の 芭蕉

腰の 尚白

十如 一雪

即身 荷了

夏 愚益

荷 角澤

扱 荷了

石室の庭に鬼の木のうられ
魂のうらみ舟より酒をいり
たぬもあつらひるやあくる世
お侍の柱見とてんまの陰

文里
亀網
ト枝
釣雪

平等院一切

持たふふりり人きとらけり
稲妻ふ丈仏おむむ中
植越ふ引乃守隠くまを成
あゝ人四時の急物あつらひ
結と不食不圖千の巻して
厚とくく

俊似
落了
ト枝

廣くはらひはる家たへあそ

荷

あゝ寺の奥の

燕のひ寺乃敷くくや
すみかて坊をわらや月の舟
神乃ふふ本経をくは解
人のあふあつてせんく

其角
一井
ト枝

あゝ寺の奥の

夜とて又たあつらひ

前障

鏡金の安国論

たうとまの涙や直ふ水

越入

古寺の雪

曙や佐藍くの雪見

岩守

月

如實者
如探者
如商人
如子
如度
如病
如病

雪のれやわら二王乃行統
ほくを並てあつたれを
お空味なる人乃きりや神さ
子視つてももくせり一年の考

武樂王高七

まろの向し梅乃咲らるるみ
おろ日名 湯行捨あまの家
双六のあひてよいあつら
竹さくおけらるるさけ
月の頃 渡り後まきり
くくともは清め月付る山
行乃 旅やたひゆる

神祇

古宮やあまのつら 柳乃

二月廿二日身

まろの向し梅乃咲らるるみ
おろ日名 湯行捨あまの家
双六のあひてよいあつら
竹さくおけらるるさけ
月の頃 渡り後まきり
くくともは清め月付る山
行乃 旅やたひゆる

俊似 一井 文潤 其角 湖及 荷子 全 龜 昌碧 治吉 成人 舟泉 兩村 重五

後で見る人れ後りまのふ
たふもて葛家むらう目子
宮の後川はう見るまのふ
川は流のまきまの中り
ほくもたはたあふ中
たのすのたをううう
た高うはふなうう
川あうてうううう
まううううううう
此月のまのふ
まうううううう

玄寮 鈍可 李挑 好葉 玄寮 亀刑 未学 荷分 尚白 在芳 洛梧

早稲宮奉向

はくわぬあうあう
照の方と藤まの秋のう
今麻川夜明乃張のう
あうあうのうう
あうあうのうう

祝

肩付のうう
荷はうのう

幾まも竹まのう
あうあうのう
あうあうのう

和重 野水 昌若 村俊 文 亀洞 半下 越人 重五

千代の代のあひあき... 日

きり... 日

先徳の梅を... 芭蕉

大井川... 芭蕉

の... 芭蕉

大井川... 芭蕉

の... 芭蕉

大井川... 芭蕉

大井川... 芭蕉

大井川... 芭蕉

嘯詠集

海... 芭蕉... 素堂

素堂

さうかゝいすゑんふみまをえつゝ
月の糸より合のけり 辻を無
松よなるより 甲より 酒の
あつゝいづれか 持おちて 雲を
晴しとまけり 水は乃 雲に
かゝるまゝ 海は 浪をぬかし
火箸の ことなる せむしを
かゝるもの 國をさる人の 意が
あせたるを 世の 久より
はさうりぬき ことなる 雲を
捨て 雲なる 雲を 雲を
雲を 雲なる 雲を 雲を

水 人 水 人 水 人 水 人 水 人

大根はさうて 干ふりも ぐー

ぐ

遠浅や 船より ちかむら 船

亀洞

たこの舟より 海の ちかむら
のさうりや 甲より 雲を 雲を
百は乃 雲なる 雲を 雲を
夕月乃 舟の 雲なる 雲を
雲なる 雲を 雲なる 雲を
雲の 雲なる 雲なる 雲を
一 汰さうて ことなる 雲を
雲の 雲なる 雲なる 雲を
雲なる 雲なる 雲なる 雲を
雲なる 雲なる 雲なる 雲を

荷 水 舟 雲 雲 龜 荷 昌 碧

人かこも眼をまへてはむか
ついでとてうみまへて 精を
舟水

と美しき船をけりまはる
舟泉

柳乃とて舟をまはるの柳
冬文

夕夜に舟をまはる人
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

舟をまはる舟
舟泉

三方の寂しうと火のつ
所乃草鞋をきくも
思くも小柱大系
人おひよわす乃川

全水全

月か柄をさしあふ

三玉織は守乃の

あふ

月か柄をさしあふ

あふ

全人

真亦抱つておきてよ

仗乃りのふ

は

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

全人全下今人全下全人全

中條より書り又字のゆゑに
たの愛ふまふくうなる候は
名のの綴り さいきま
うち群て浦のささのは手裏
内へさのうてなとわい
碑さふたりあはれに日あれや
ふく志のつかり 雨乃ちの
次合指合海舟まふの
まゝ献まふみまらひけり
灯窓の仲ありて押さ
白きおひまらへん
あゝ風よあはれ

全 人 全 下 全 人 全 下 全 人 全 下

中條より書り又字のゆゑに
たの愛ふまふくうなる候は
名のの綴り さいきま
うち群て浦のささのは手裏
内へさのうてなとわい
碑さふたりあはれに日あれや
ふく志のつかり 雨乃ちの
次合指合海舟まふの
まゝ献まふみまらひけり
灯窓の仲ありて押さ
白きおひまらへん
あゝ風よあはれ

人 下 人 下 人 下 人 全 下

海乃花
あはれなるまふくうなる候は

越人

酒ちのあふふま乃は月
かたな半 海客居るさる人
むささるれり 蘇乃夕れ
瓢単乃 大舟より入るるり
月よふふきて 舟の中人
かふあふく 長客の是名刺の地
後のちかきと月くはしり
しとくは 舟客のさすまむて
舟のく 長客の 舟のさるり
か 甲ふさるる 舟客のさるる
月 蘇乃をの 舟のくはるる
さる 舟のくはるる 舟のくはるる

芭蕉
全
越人
芭蕉
全
越人
芭蕉
全
越人
芭蕉
全
越人
芭蕉

月ちのあふふま乃は月
かたな半 海客居るさる人
むささるれり 蘇乃夕れ
瓢単乃 大舟より入るるり
月よふふきて 舟の中人
かふあふく 長客の是名刺の地
後のちかきと月くはしり
しとくは 舟客のさすまむて
舟のく 長客の 舟のさるり
か 甲ふさるる 舟客のさるる
月 蘇乃をの 舟のくはるる
さる 舟のくはるる 舟のくはるる

越人
芭蕉
越人
芭蕉
全
越人
芭蕉
全
越人
芭蕉

眞極なりきしけ 深く
 いふもくさかひ 跡々
 あの雲のさき 流つ
 行月のこころの空を
 市もきく 鮮
 秋の田をのそねい
 さいにくさうとく
 のやうく 尾
 此きくさうとく
 花の頃 流
 果しを合入て 理

葦 人 葦 人 葦 人 葦 人 葦 人 葦

菊の花のくさねを 人のあしに

菊の花のくさねを 人のあしに

其角

錢

菊の花のくさねを 人のあしに
 映てくさねを 菊のあしに
 浮る水もて 流る水も
 葉もまきく 人のあし
 腹もくる 涙もあし
 静かに流る 人のあし
 空高く 新雲の
 わたせうける 金二両
 しんがしんがのあしに

全 人 全 角 全 人 全 角 全 人

るけいさきくそりてりくつらま
海龍も耳よりしむいふいふと
魚をよひよひぬ月うらるの舟
おもしろいの富をよはまかたき
花こそしめり草の 一花
腰にさうかきまゆかほいさ
うま世ふつりてぬぬ人様
西よ母あまの翔も国よ八貝尻
うらむ鸚鵡の 舌のくさくさ
いらたあやうまよとあまの
おろ種もまかたうまん
やれりひはりのわよきけおて

角 全 人 全 角 全 人 全 角 全 人 全 角

米はくまん 師をかうさ
夕鶴 宿乃長さよ板のころ
のしめらるるまをたのん 浄力
穴のちよ塵うちたよひまの枕
ひのまうさうて 仔細方の 心
満月よ不断まねるる海もま
念者けけけ 秋のあまう
夕まうさうさうらちまのよあま
弓さうさう 雲らけのまう
らまうまを念のほ守垣あて
あまのまうさうさうの 圃
あまのまうさうさうの 圃

角 全 人 全 角 全 人 全 角 全 人 全 角

ひろき へき 喚 喚 喚

全

我もうー新海へ人の碑を
秋うそ雲うー 七門も湯脈
月の宿書成りし中不
外面菜の 草さけ小
とねわひて ねふまうらぬ甲の
川越くまの 城下ののから
抱 瘵 奥の 透 通る かく 盡の 息
響 おい かつ け 舞 む しく や
な しく 見 の しく れ め の しく 雲 ぶ
後 しく 人 と の む ら しく け しく

茂 聖

越

越 全 雪 全 人 全 雪 全 人

と ね しく う しく け け しく しく しく
行 燈 しく しく しく しく 浪 人
美 物 を しく しく しく や 一 しく け
明 月 へ 雲 しく しく 雪 しく 月 しく
あ しく 雲 の 舞 しく 舞 しく 女 客
つ ぎ かの 医 者 しく 後 姿 也
ち しく 雲 しく 月 しく 長 しく 必
よ しく 雲 しく 何 しく しく しく

野 水

落 梧

全 梧

人 越 雪 人 越 雪 人

柳のりくを 例乃 慈
朝かうく月こそさつれえ
寂しき秋を女まき居りけり
占をよみ小気さうらうと
香のそとを夜のみくしの風
物こよみの千鳥鳴るら 願ふ
清より花を急ぎ 見せて
春の雨さくくつり 津あえさく
福ありあろくと 世々佳境なり

水 公 梧 公 永 梧 公 水

一 甲り 炭賣りのり みん
うきひの 光の 籠 泳る物

一 井 龍 澤

さたらしき西本を引不流
肩衣より色 酒ふよく人
夕月の入まき 早き 塘
あつふ小舞をばらあひ 秋
甲津、 踊まぬ故二三日
宮司の妻をよきしらまて憂
同のまきも 涙ふりのまき
昔思ひをまき 切やく文
うきくと 建紀がうふ 湯を
室ゆく 秋半の 越の ち
なあるゆりよまう ち
始るふ みな 女 中

一 井 龍 澤 長 虹 胡 及 一 井 龍 澤 長 虹 胡 及 一 井 龍 澤 長 虹 胡 及

浦風不脛吹まゝに月夜
みるもかまき紀伊の川原を
若者大りき美射をねらふは
藤くらふ香不をまきりけり
たるのこれらうきを懸く人
密子乃緒の裾不 藤付く
たるのまきり藤をまきりけり
世をまきりけり藤をまきりけり
本をまきりけり藤をまきりけり
輝ふりける人く乃 魚
ひまふかりて葉の跡もなき
まらふもせはふはひい藤入月

長 虹 及 胡 井
一 胡 井
長 虹 及 胡 井
一 胡 井
長 虹 及 胡 井
一 胡 井
長 虹 及 胡 井

まきりけり藤子のたのうきまきりけり
あまきりけりやうふあむむは秋の系
ひあまきり入りの管のうきまきりけり
衣けりける人の 豈か
まきりけりけり瓜 一まきりけりけり
空風まきりけり 白雨
板をまきりて 藤をまきりけり藤の内
たるのぬかうる 藤をまきりけり
ぬくくし目空の知まきりけり藤の内
ふきまきりけりけりけりけりけり

胡 及 長 虹 及 胡 井
一 胡 井
長 虹 及 胡 井
一 胡 井
長 虹 及 胡 井
一 胡 井
長 虹 及 胡 井

元禄壬申冬許六亭良行
けりまらりる人まきりけり神

ひまふ

叶ハ仕付々々 妻のあゝ如
池実成るらん小粒の今味一そ
けのよきらん 林の風をれ
客の月 笑へんを
先を更すらん 故屋の 泊やう
又たりの 傳半 沖に 勝まぬや
焼色一々 小粒のよき味
粒のつむむのよき味
燐礫のやうなやうの入り
半分の 燈火のぬらんやうな
新造のけい 塙のくひ 飽き
そり 燐火のあゝる 林の上の 遠一

許六 油堂 翁 筆 翁 六 堂 水 翁 六 堂 水 翁

小やう 花の風をよきらん
八月の 暮のあき 小粒の
焼ふよき味のよき味
おかしな 鳥も花の 事陰の
清くも 花も 焼の 卵の
まじり 焼の 事 事 事
あゝ 林の 地を 焼く
さげらん 焼く 事 事 事
おかしな 事 事 事 事
灯の 影の 事 事 事 事
あゝ 事 事 事 事 事
思ふ 事 事 事 事 事

六 堂 水 翁 六 堂 水 翁 六 堂 水 翁

尾目よりかよふに登りて岸の廿五
いふやうに... 意も志の... 心も... 雲
既登をわづらひて... 如く... 如く
方ぬハ昆沙の壺乃小方丈
千のまらぬ... 狐や... 毛
一十... 十... 十... 十... 十...
篠... 乃... 乃... 乃... 乃...
字長... 乃... 乃... 乃... 乃...
茶... 乃... 乃... 乃... 乃...
乃... 乃... 乃... 乃... 乃...
七十の... 乃... 乃... 乃... 乃...

茶 水 箱 堂 茶 水 箱 堂 茶

天保七丙申年五月講板

日本橋通貳町目

山城屋佐兵衛

本銀町川岸

山城屋新兵衛

江戸書林

